１０代目ファミリーと最強のヒットマン、幕末に参上!

彩斗。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１０代目ファミリーと最強のヒットマン、幕末に参上！

【Ｎコード】
Ｎ００６９Ｚ

【作者名】
彩斗。

【あらすじ】
未来での白蘭との激闘を終え、無事平和な過去に返ってきた綱吉達。そんな時、いきなり幕末にトリップしてしまって…！？
１０代目ファミリーが幕末で大暴れ！

プロローグ（前書き）

！注意！

・この小説は薄桜鬼とリボーンの混合小説です（、・ω・，）
・作者の突然すぎる思いつきから始めますので色々おかしいです
・主人公は１０代目ファミリー達とリボーンです
・ＲＥＢＯＲＮ！→薄桜鬼にトリップします
・バットエンドフラグはとことんへし折ります！↑オイ
・そしてリボーン知らない人にはよく分からない内容です

薄桜鬼メンバーを幸せにしたくて始めた小説です。
そういうの苦手な人にはこの小説はオススメできません（，・ω・、）
トリップするメンバーは

沢田綱吉／獄寺隼人／山本武／笹川了平／ランボ／クローム髑髏（六道骸）／雲雀恭弥／リボーン

時間軸は未来編が終わったあたりです。
では長くなりましたがどうぞ！

※綱吉視点です

プロローグ

拝啓、母さん。

大変な事になりました。

俺――――――――幕末来ちゃいました…

「Σ未来の次は過去かよーっ！？」

「うるせぇぞツナ」

「いてっ！」

事は少し前にさかのぼります…

＊

「ぎゃはははは！ランボさんのお通りだー！」

「お、おいランボ！騒ぐなよ！」

「アホ牛！十代目を困らすんじゃねェ！」

「ハハハ！皆元気なのな～」

「お前らうるせぇぞ」

俺は獄寺君、山本、リボーン、ランボの5人で並盛商店街に来ていた。
今日、学校が終わって山本が

「久々にゲーセン行かね？」

と言い出したのがきっかけだ。

俺らは未来でミルフィオーレと…白蘭と闘った。
ユニやγ（ガンマ）のおかげで俺らは白蘭を倒し、平和な過去へ帰ってこれたんだ。

それを実感するように俺達は毎日のように遊んだ。
俺の家で遊んだり、今みたいにゲーセンに行ったり…未来に行くまでは普通に思えてたけど、こんなにも大切な時間だったんだと実感したんだ。

もう何も起こりませんように…、

もう誰も巻き込みたくない。
京子ちゃん、ハル…ランボにイーピン達だって…もう戦いに巻き込みたくない！

俺はそう思っていた。

「あれ…？」

「っわ！や、山本？どうしたの？」

先頭を歩いていた山本がいきなり足を止めたため、ボーッとしていた俺は気付かず、背中にぶつかってしまった。

「あ、わりぃツナ…」

「オイ野球バカ！何してんだ！」

「あんさ…俺ら以外に此処――――――――――――――人いなくね…？」

「え…」

周りを見渡すと確かに人がいない。

「おかしいな…さっきまでたくさんいたはずだったんだけどな」

「あぁ…」

「……嫌な予感がしやがる」

リボーンがそう言ったその時、

「くぴゃ！？」

「ランボ！？」

突然ランボの体が透けはじめたんだ。

「じゅ、十代目！！」

「ツナ！！」

「っ…みんな！？」

見ると獄寺君達の体も透けてきている。

そして俺も…

「う、うわあああああ！？」

そこで俺の意識はなくなった――――――――――。

＊

気付いたら道のど真ん中に俺らは倒れていた。
なんなんだよ本当に…。

「にしても…此処は本当に幕末なんですかね…」

「多分な…さっきのヤツが嘘を言ってるとは思えねぇ」

俺らが気が付いたのはついさっき。

目を開けるとそこには時代劇のセットのような街並みが目の前に広がっていた。
さっきまであった太陽は沈み、代わりに月が昇っていて、辺りを煌々と照らしている。
俺らは夜まで此処に倒れていたのかな…？

で、でも此処…並盛商店街じゃないよね…？

疑問ばかりが頭を巡っていた。

そんな時、着物を着ていて髷(まげ)を結っている、まるで時代劇の登場人物のような男性ががこちらを物珍しそうに見ながら歩いてきた。
その人にリボーンが「今の年号を教えてくれ」と聞いたのだ。
男の人は流暢にしゃべる赤ん坊にビックリしながらも、

「今は文久だよ」

と答えた。

この言葉を聞いたとき俺はよく分からなかった。

勉強がまるっきりダメ（てゆうか運動も全部ダメだけどさ…！）な俺には聞きなれない単語だった。
獄寺君に聞いてみると、「幕末あたりです十代目」と言われやっと気付いた。

――――――――あぁ…俺タイムスリップしちゃったのか、と…

そして冒頭にいたる…

「ツナー此処何処なんだもんねー？」

「幕末だよ…」

「ばくまつって何ー？」

「ば、幕末ってのは…「オイお前ら何やってる！」…え？」

後ろからいきなり声を掛けられ振り向くと、そこには浅葱色の羽織を羽織ったすっごいイケメンのお兄さんが3人。

しかも…

「刀…！！？」

その手には刀が握られていた。

「もう一度聞く…お前ら何をやっている？逃げるなよ…俺ら新選組から逃げられると思ったら大間違いだぜ」

黒い髪の男の人が此方に刀を向けながらそう言い放った。

え、てゆか新選組…？

「「「「Σハァァァァァァァァァ！？？」」」」

俺と獄寺君と山本の声が辺りに木霊した。

「こりゃやべぇな」

「くぴゃ？」

母さん…俺…やっぱり幕末に来ちゃったみたいです…

プロローグ（後書き）

すいません、プロローグめっちゃ適当で…

リボーンも薄桜鬼も大好きでついついやりたくなったんです（＊´∀、＊）←オイ

gd gdな予感がしますがお付き合いください！

第1話

もう一度いいます俺…幕末にいます。

「マジで幕末かよおおおお！？」

「だからうるせぇぞツナ」

「Σいてっ！てゆかこれデジャブー！！」

作者毎度同じパターンじゃねぇかｙ（黙れダメツナ。）作者ひでぇえええ！？

「おい、さっきから何を話している」

「え、あ…マ、マジかよ…」

「山本！」

山本は藍色の髪をした男の人に刀を向けられていた。
ど、どうしよう…！！
とりあえず山本を助けなきゃ…！

そう思った俺はポケットから死ぬ気丸（しぬきがん）とグローブを取り出す。
すると、何かよからぬ物を持っていると思ったのか、茶髪の髪の人が俺の首元に刀を当ててきた。

ヒ、ヒィィィィ！！怖ぇぇぇぇ！！

「オイてめぇ！！十代目に何しやがる！！」

「十代目？なんだか知らないけどそんなの僕には関係ないよ」

「んだと！？」

獄寺君はボムを構えた。

ってボム！？

「ちょ！獄寺君ストーップ！！」

此処でそんなもの投げたら俺も死ぬって…！！

「果てろ！！」

「なっ…！？」

茶髪の人の注意がボムの方に逸れた。

――――――――っ！今だ！！！

「っ総司！！」

「ツナ！！」

シュウウウウ・・・・――――――――

「獄寺、やめろ」

「！十代目！！」

間一髪。
茶髪の人の注意が俺から逸れた隙に死ぬ気丸を飲んで死ぬ気モード化。
そして素早く間合いに入り、ボムの着火線を死ぬ気の炎を当て止めた。
あと一秒でも遅かったらボムの爆発に巻き込まれていただろう。

「ふっ…ツナよくやったぞ」

「リボーン…お前も止めてくれ…」

「ファミリーを止めるのはボスであるお前の役目だぞ」

「…」

一瞬だけリボーンに殺意が沸いた。

とりあえず今はそんなことよりも山本を助けなくてはいけないな…

俺は再びグローブに炎を灯し、高く飛ぶ。

「っ！」

飛んだことにビックリしたのか藍色の髪の人が刀を俺の方に構えた。
その隙を山本が見逃すはずもなく、持ち前の運動神経で獄寺達の元へ走った。

「ふーっ…ツナ助かったぜ」

「この野球馬鹿！十代目の手を煩わせるんじゃねェ！」

「ハハッ！わりぃ」

言い合いをしている（というか獄寺が一方的にしてるだけ）２人を横目に、俺は地面に降り、死ぬ気状態のまま新選組の人達に向き直った。

「さっきの質問だが…俺達も何故此処に居るのか分からないんだ。」

「は？」

「俺らも何が起きているのか状況が把握できていない。頼む攻撃をやめてくれ」

俺は深く頭を下げる。

俺のあまりの豹変にビックリしてるのか…それとも頭を下げられたことに驚いたのか、新選組の人達はフリーズしていた。

しばらくすると我に返ったのか、黒髪の人は他の2人と顔を見合わせた。
後ろの2人が小さく頷いたのを確認すると黒髪の人は「…着いてこい」と言い、刀を仕舞ってくれた。
後ろの2人も鞘に刀を納めていた。

「助かる…、」

「ただし！…逃げるなよ？背を向ければ…斬る」

「んだとテメェ「獄寺、此処はついていくのが得策だと思うぞ」っリボーンさん！」

「いいから大人しくしてろ。…それにもしもの事があってもお前ならツナを守り切れるだろ？」

「！」

リボーンの口車に乗せられた哀れな獄寺は、嬉しそうな表情で「俺は…十代目を守れる…」とかなんとかブツブツ呟いていた。
そんな獄寺を無視して山本とリボーンとランボは新選組の人達の後を着いて行っていた。

「獄寺ー置いてくぞー？」

「はっ…！？ってオイ野球馬鹿！お前何ナチュラルに着いて行ってんだよ！」

「獄寺うるさいもんね…ランボさん眠たいんだもんね…」

「っけ！ガキが！」

「お？ランボ眠いのか？抱っこしてやるぜ」

ランボは子供だから仕方がない。
今は夜の様だし眠いのは当たり前だろう。
山本はランボを腕に抱き、「よーしよし！」と頭を撫でている。
さすが山本、子供の扱いが上手いと思う。

「…ねぇ君。その炎何？」

「…説明すると長くなるんだが…これは、「死ぬ気の炎だぞ」！リボーン」

「死ぬ気の炎？」

「死ぬ気の炎ってのは超圧縮エネルギーだ。ただの炎じゃねぇって事だな」

「え、えねる…何？」

「力って事だ」

「ふーん…」

茶髪の人は意味ありげな笑みを浮かべ、リボーンに近づいた。

「……君、赤子なのに言葉上手いね」

「俺は赤子じゃねぇぞ。れっきとした大人だ」

「…ッアハハ！君面白いね！大人って…どう見ても赤子にしか見えないよ」

「少なくともお前よりは年上だぞ」

「君気に入ったよ…僕は沖田総司、君の名前は？」

「リボーンだ」

「変わった名前だね、よろしくリボーン」

2人はニヤリ、と笑いあった。（ニコリ、じゃないのは仕様↑）

というか沖田総司って…たしか新選組の一番組組長…
勉強できない俺でもさすがにそこらへんは覚えている。
さっきから何度も言っている気がするが本当にタイムスリップしたんだな…。

「オイ総司！余計な事しゃべってんじゃねぇ！」

「はいはい…まったく土方さんは厳しすぎなんですよ」

黒髪の人を見て、沖田は苦笑いし、踵を返して歩き始めた。
さっき沖田はこの黒髪の人の事を「土方さん」と言っていた。
と言うことはコイツは…、

「ったく総司のヤツ…さっきので分かったと思うが…俺は新選組副長、土方歳三だ。鬼の副長と呼ばれる俺から逃げられると思うなよ」

土方、歳三――――――――…

あの有名な土方歳三が、目の前にいる…。
痛いほどの殺気を放ち、隙がない。
いつでも抜けるように、と手は刀に添えられている。
本物と判断するには十分だと思う。

「着いてこい、お前らの事情を聞いてやる」

低く唸るような声が暗闇に響いた。

第1話（後書き）

ああ相変わらずのgd gd！！

おいら新潟住んでるんですけど寒くて文字打ってると手が悴んできます（´∀｀；

寒いですハイ！↑

もしよければ感想やアドバイスお願いします～

此処までお付き合いありがとうございました！

次回もぜひ宜しくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0069z/

１０代目ファミリーと最強のヒットマン、幕末に参上!

2011年12月5日10時51分発行